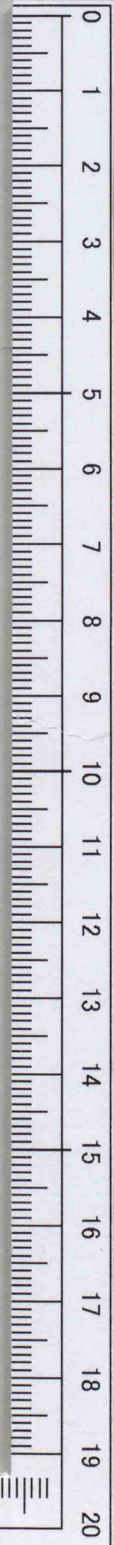


中等國語讀本
落合直文編
卷二

375.9
Oc8
資料室



30291 ✓

教科書文庫

3
810
44-1902
200030
1968

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

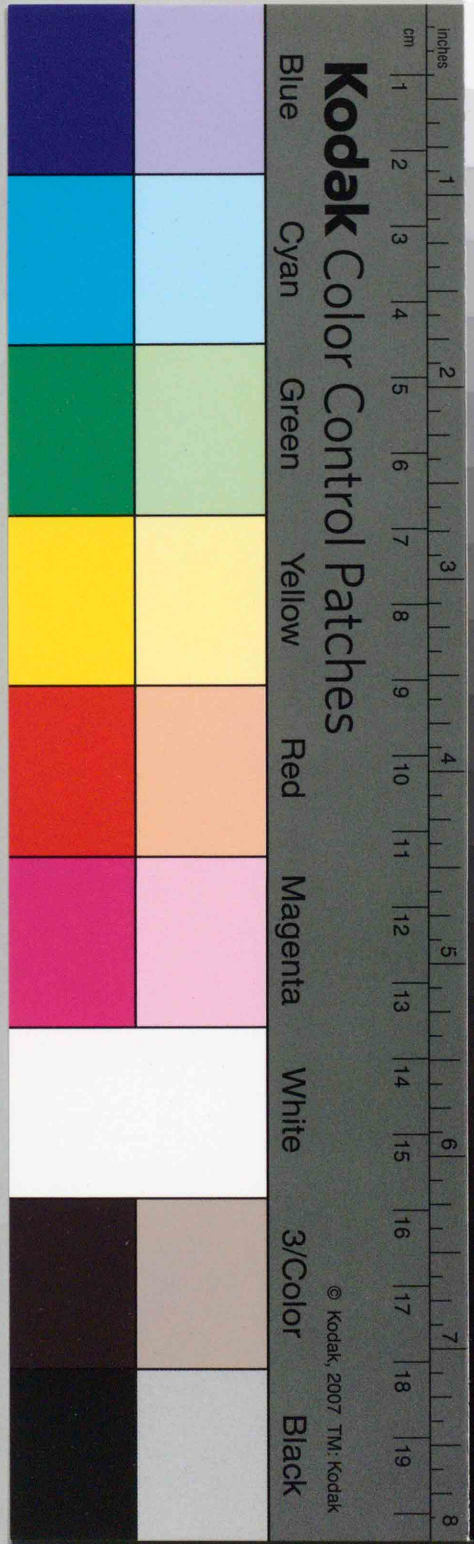


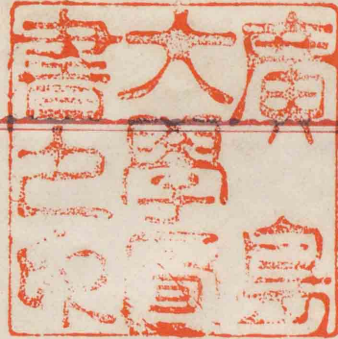
© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak





中等國語讀本卷二目次

正書一、孝道……………一

二、平重盛……………五

三、孝子勘七……………一

四、寄木村……………一五

五、月見に友を招く書……………一六

六、舊山川……………一八

七、望遠鏡の發明……………二〇

八、ビスマルクの幼時……………二五

九 余が劍術の修業……………三四

一〇、老廢兵 その一……………三六

一一、老廢兵 その二……………四一

一二、平壤の曲(新體詩)……………四七

一三、臺灣日記 その一……………四八

一四、臺灣日記 その二……………五三

一五、電信局開業式の祝詞……………五九

一六、外國人の勤勉……………六五

一七、東京 その一……………七〇

一八、東京 その二……………七六

一九、土地と植物……………八〇

二〇、山家(今様)……………八六

二一、田舎人の話……………八七

二二、普通文の話……………八八

二三、一壺千金……………九三

二四、諺言五則……………九五

二五、老いたる獅子……………九八

二六、動物の保護色……………一〇〇

二七、白羽の雀……………一〇三

二八、ベルナルド、パリッシー……………一〇九

二九、 塙檢校保己一……………一二七

三〇、 活版の由來……………一二一



中等國語讀本卷二

正信 一、 孝道

順従は、子女たるもの、第一の務なり。父母の命ずる所、必ずこれを爲し、父母の禁ずる所、決してこれを爲すべからず。父母の、その子の爲に計畫する所は、その子の智徳、能力の及ばざる所を補充し、その子をして、過失なからしむるにあれば、これに順はざるものは、常に父母の心を苦むるのみならず、またみづから、

禍を招くものなり。

人は、須らく、智徳、己より優れるもの、忠言を、傾聽すべし。父母は、年齢、智徳、共に、われに優り、加ふるに、世故を閱歷し來ること、久し。この點のみにても、われは、その命に従ふべきものなり。いはむや、父母は、吾を産み、吾を養ひ、殆ど、身命を顧みずして、わが福利を希望するなど、至大なる恩人なるをや。

父母、過あれば、子女たるもの、愼みて、これを隠諱すべし。古人も、父は、子の爲に隠し、子は、父の爲に隠す。直きこと、その中にありと、いへり。もし、父母の命令にし

て、道理に違ふことあるも、子女は、猥に、その意に忤ふべからず。宜しく、愛敬の意容（ん）を失ふことなく、徐に、これを諫止すべし。

父母の恩に報ゆる道、二つあり。父母の體を養ふは、その一にして、父母の志を養ふは、その二なり。而して、これを貫くに、愛敬の誠意を以てすべし。徒に、口體、耳目の奉養を以て足れりとせば、孝といふものは、禽獸も、なほ、これを能くせむ。父母は、主として、その子の誠意を喜ぶ。たとひ、身、錦繡をまといひ、口、大牢に飽くとも、苟も、子女にして、眞に、孝道を盡す心を缺かば、父母、却

りて悲まむ。誠意、誠心を以て、父母に事へ、婉容、愉色を以て、これを侑むれば、弊衣、粗菜も、父母、却りて喜ばむ。愛して、敬せずば、狎れて、禮を失はむ。これ、父母に事ふる道にあらざるなり。敬して、愛せずば、遠ざかりて、親を缺かむ。これまた、父母に事ふる道にあらざるなり。孝道は、愛敬、並び行はるゝにあり。

子女、いよいよ、生長すれば、父母、ますます、老衰す。子女、丁年に達し、父母の養育を離れて、獨立の生活を爲すに至れば、父母の殘年は、既に、幾何もなし。この時に當りて、厚く、孝道を盡さずば、後年に至りて、悔恨、夜を

徹するも、その効なけむ。樹、靜ならむと欲すれば、風、やまず。子、孝ならむと欲すれば、親、あらず。これ、人生、至大の恨事にあらずや。(井上哲次郎著倫理教科書)

二、平重盛

平重盛は、清盛の長子なり。人となり、忠謹、溫厚、勇武も、また、人に超えたり。藤原成親、兵を擧げて、平氏を滅さむと謀るや、後白河法皇も、それに與り給へるを以て、清盛、深く、これを恨み、大に、將士を集めて、將に、法皇を、別宮に移し奉らむとす。重盛、これを聞きて、大に驚

十
月
十
五
日

き、急に、駕を命じて、父が西八條の第に赴けり。
 一門一族の人々、皆、色々の甲冑を装ひ、馬の腹帶、強く引き止め、などして、今にも駆け出でむ有様なるところに、重盛、烏帽子、直衣にて、優然と入り來りければ、弟の宗盛、その袖を引きて、「これほどの大事に、何とて、甲冑をば召されざるか」といへば、重盛、聲を勵して、「汝等、何故に、かくは、たち騒ぐぞ。われは、大臣大將なり、寇賊鬪を犯すにあらざるよりは、甲冑を着せむ事、れもひもよらず」とて、尻目にかけて通りぬ。清盛、遙に、これを見て、俄に、法衣を纏ひけるが、衣の襟あきて、鎧の金

*宗盛の
甲冑
は
召
さ
れ
ざ
る
か
と
い
へ
ば
重
盛
は
聲
を
勵
し
て
と
い
は
れ
る
が
法
衣
を
纏
ひ
け
る
が
衣
の
襟
あ
き
て
鎧
の
金*

物のあらはるゝを、とかく、引きつくりひ居たり。

やがて、清盛は、重盛に向ひて、「今度の事、全く、法皇の御心より出でたりと聞く。世のまづまらむ間、暫時、法皇を迎へ奉らむ」といへば、重盛、落つる涙を抑へつゝ、

「兒わがこつらうらら、尊顔を視て、家門の、既に、衰運に屬することを知れり。兒、これを聞く、世に四恩あり、皇恩を最も大なりとすと。抑も、我が家は、桓武天皇の後胤を辱くせりと雖も、なか頃、人臣に下りてより、微々として振はず、平將軍の功を以てしても、猶、僅に、國守の官を守るに過ぎざりき。今、大人に至りて、忽ち、太政大臣に至

*皇恩
四恩
尊顔
微々*

り給へるのみならず、兒の如き不肖なるものまでも、よく、大臣大將の榮を汚せり。その他、一門の宗族、一人として、朝に列せざるものなく、田園まことに、天下の半に過ぎたり。さては、世の恨を受けむこともとより、然るべき道理なるを、今、幸にして、讒人の捕れたるは、これなほ、我が運命の盡きざる所と思召さるべし。さるを、いはれなくも、法皇を恨み奉らせ給ふこと、冥加に於て、まことに、その恐あり。兒、また、これを聞く、王事を以て、家事を辭す、家事を以て、王事を辭せずと。重盛、義として、居ながらに、朝家の傾き給はむをば、見過ぐ

田園まことに天下の半に過ぎたり
即ち朝に列せざるものなく
法皇を恨み奉らせ給ふこと
冥加に於て
王事を以て
家事を辭せずと

然り

強ひて

し難し。忠ならむと欲すれば、孝ならず、孝ならむと欲すれば、忠ならず、兒の進退、まことに、こゝに極れり。大人、強ひて、事を擧げられむとならば、先づ、兒の首を刎ねて、後にせられよとて、涙と共に諫めけるに、清盛、今はかへさむことばもなく、つと立ちて、内に入りぬ。重盛は、並み居る一族郎黨を顧みて、深く、その輕擧を戒め、かくて、我が家に歸りけるが、猶心にかゝりしかば、急に、令を出して、大事あり、速に、來り會せよとて、手兵を集めぬ。

沈重の聞え高き人のかく、たち騒がるゝは、必ず、由

々しき大事なるべしとて、人々、先を争ひて、馳せ集り、
一夕の中に、二萬餘騎に及びぬ。重盛、即ち、家臣をして、
父の第に赴かしめ、いはしめて曰く、法皇、大人の事を
擧ぐるを聞かれ、兒に命じて、これを討ぜしむ。されど、
兒、まさに、身を以て、詫び奉るべければ、願くは、心を安
ぜられよと。清盛、大に驚き、急に、人をして、重盛を止め
しむ。重盛、泣いて曰く、わが父の過を救ひて、却りて、そ
の心を傷へり。わが罪、輕からずと。みづから、門に出で
て、集れる兵士を勞し、盡く、罷めて歸らしめたりとぞ。

禍謝

三、孝子勘七

紀伊國、東牟婁郡、小山浦の民に、勘七といふものあり。早く、父にわくれ、又、兄をも喪ひしが、一人の老母の齡八十に及べるを、力を盡して、孝養せり。されど、その家、貧しくて、他の資なかりければ、常に、日傭して、その日を送れり。さて、傭主に向ひ、わが老母、歩行不自由に、薪水をとること能はず。願くは、朝に、緩く行き、夕に、わそくかへる事をゆるし給へ。その間は、われ、力をつくして、少しも怠らじと、いふ。傭家、食をあたふれば、常に、その半を残せるを、怪みて問へば、持ち歸りて、母に

贈るなり」といふ。主人はじめはその貧しきがためならむと思ひしに、後にその孝心を知りて、汝悉く、これを食へ。われ、汝が母のために、別にあたへむ」といひければ、勘七謝していはく、われ常に、傭よりかへりて、母の食を營めり。それを營む間、少しく、これをあたへて、その心を慰むるのみ。多く、主人を勞する事を願はずといへり。

冬の寒きにあたりて、人もし、衣を與ふれば、即ち母にとらせて、みづからは、蓑衣を着ながらあり。里人いはく、若き者、皆、遠く出でて、利を求むるに、汝、何ぞかく

て、家にのみある」といへば、勘七いはく、吾も、これを知らぬには、あらねども、思ふに、われ、遠く行きて、日を経なば、朝夕、誰か、母に侍るものあらむ。故に、これを欲せず」といふ。里人いはく、妻を娶りて、母の養に侍らしめば、汝、遠く行くと、又、何をか憂へむ」といへば、勘七いはく、われ、貧しくして、朝夕をわくる事も、能はざるに誰か、わが妻となるものあらむ。假令、ありとも、母の心に順はざらむには、かへりて、わが不孝の罪をまさむのみ」といひて、娶らず。里人、その孝を感じ、その貧を憐みて、傭の事あれば、まづ、勘七をやとひて、その報を得

しめたり。

あはれ、天は、高きに居て、卑きを聞くといへり。勘七が孝養の事、公の聽に達しければ、感のあまりとて、母子一生涯、年々、米十俵を賜ひて、孝心を表せられたるは、ことなる仁惠なり。その後、延享三年の頃、母、年八十一にて終りしかば、寶曆四年に至り、勘七、公に請ひて、申しけるは、某年々、賜はる米を以て、母を養ひ終へつ。かつ、田若干反を買ひたれば、産業、定めぬ。御恩のほど、いづれの日か忘れむ。願くは、今より後、賜はる米を御倉に納め奉らむ。實に、大海の一粟なれども、せめては、

延享三年
勘七
買ひ
米十俵
孝養

その萬分の一をも補はむと思ふなり」と、申しければ、公、ほめて、その請をゆるされたり。(久米幹文著水屋集)

四、寄木村

やどり木村は、相模國足柄郡の山奥にて、松田の驛より、西の方二里ばかりにあり。戸數二百八十、一村、こぞりて、親屬のごとく、村長をば、親父と呼び、吉凶あひ訪ひ、患難あひ濟ひ、訴訟なく、盜賊なく、はた、租に不納なく、さながら、太古の民のごとし。村長安藤氏は、また、村民を視ること、わが子のごとく、村の利益を視ること

と、わが家の利益よりも篤く、名主と呼びし時より、今日にいたるまで、四十餘年、一日のごとく、上下あひ忘るゝありさまは、眞に、自治の村とぞいふべき。余、一日、散策のついで、その村にいたり、安東氏の家に小憩しつゝ、

我もまた、住まばやとしも、思ふかな、

みやまのわくの、やどり木のさと。

(井上毅著 梧陰存稿)

五、月見に友を招く書

朝夕は、漸く、冷氣を覚え、心地よきかぎり候ふ。承

れば、兄には、當時、箱根の温泉に、御保養のよし、私も、過日來、父と共に、この鎌倉の別荘に出かけ居り候ふ。御承知の如く、明夕は、中秋に候ふが、思へば、一昨年、昨年、兄と共に、その影を賞せしを、今年にかぎり、その樂を共にせざるは、いかにも、残念に存ぜられ候ふ。高根に上るさやけき影、溪間にうつる清き影、さぞかしとは存じ候へども、寄せ來る波に碎くる影を、白砂青松の間に眺むるも、また、一興には候はずや。ことに、兄には、近來、和歌に御熱心のよし、それは、父の、最も、好むところに候ふ。終夜、月照る下にて、御相手も致さむと、

志きりに、待ち上げ居り候ふにつき、是非、御來遊下されたく候ふ。先は、御案内まで、早々敬具。

六、舊山川

れよそ、古今の歴史に關係ある地に遊べば、當時のことを追想して、懷古の情を生ずるは、何人も同様なるべし。我が國にて、最も、懷古の情を催さしむる處を、奈良とし、これに次ぐものを、西京とす。西京の事柄は、稍、新しく、奈良の事柄は、甚だ、古し。さては、懷古の情は、舊き土地ほど、其の感を強りするものと見えたり。奈

良に遊びて、路、龍田川を經、生駒山、春日山、三笠山、猿澤の池、春日社などを見れば、たのづから、奈良の都の舊事も思ひ出で、また、聖武、孝謙、兩帝の盛時のことども、思ひ浮べられて、實に、俯仰感慨に堪へざるにあらずや。

奈良に比すれば、西京に縁ある史上の事柄は、稍、新しきもの多しとはいへども、また、人をして、追懷の感に堪へざらしむるもの、少からず。現に、今日の市街の名稱にても、室町とか、朱雀とか、西陣とかいひて、皆、それぞれ、史上の事柄に縁あるものゝみなるは、さらな

り、保元平治の、かの戦は、彼處なりしか、應仁、嘉吉の、かの争は、此處なりしかと、そゞろに、當時を思ひいださしむ。ことに、叡山の如きは、人世幾多の興亡を見盡ししならむか。彼を思ひ、これを思へば、蜉蝣の身、何ぞ、それ、營々たると、無常の念さへ起り來ぬ。然れども、山川に對する懷古の情は、人によりて、其の感も、種々なるべければ、一樣にはいひ難からむ。(矢野文雄文稿抄録)

七、望遠鏡の發明

眼鏡に、二種あり。老人眼鏡と、近眼鏡となり。老人は、

こまかなる物を、明に、見ること能はざるが故に、眼鏡の力をかりて、物の形像を巨大にせむとす。この力ある眼鏡は、表面、凸なる種類にして、即ち、凸鏡なり。また、近眼の人は、明に、遠方の物を見ること能はざるが故に、眼鏡の力をかりて、物の形像を近接せしめむとす。この力ある眼鏡は、表面、凹なる種類にして、即ち、凹鏡なり。故に、凸鏡を目にあつれば、物、大きく見え、凹鏡を目にあつれば、物、近く見ゆ。この外、凹鏡には、なほ、一の肝要なるはたらきあり。即ち、目より遠ざけて持つ時は、遠方の樹木、家屋等を、倒に見せ、かつ、近く映ぜしむ。

これ、遠方なる物體の形像が、眼鏡を透して、眼に近く、
現はるゝが故なり。

もし、暗きところより、かくの如くに、燈火を望む時
は、燈火の倒像、明に、眼鏡と目との間に現はるゝ事、白
紙を、そのところにあてゝ知るべし。これ、理科の試験
に、志ば志ば、見るところにして、取りも直さず、遠方の
像を、近所に、持ち來るものなり。故に、二個、或は、多くの
眼鏡を取りて、或は、目に近く、或は、目に遠く、種々の位
地に置く時は、各、その働をあらはして、或は、物體を、近
く持ち來るものもあらむ。或は、物體を、大きく見する

ものもあらむ。或は、物體を、近く見するものもあらむ。
これ、遠方の物體を、近く、かつ、大きく見るべき術にし
て、望遠鏡の原理、實に、こゝにあるなり。然れども、望遠
鏡の發明は、かくの如き、嚴格なる理科の智識により
て、出で來りしには、あらずして、かへりて、可憐なる兒
童の試験によりて、出で來りしなり。

むかし、和蘭に、眼鏡師ありしが、一日、その子の、悦び
呼ぶ聲の甚しきを聞き出でて、これを見れば、竹筒の
前端に、凸鏡をはめ、後端には、凹鏡を嵌めて、遠寺の塔
を望みつゝ、ものいふなりけり。父、これを取りて見る

に、不思議なるかな、塔は、眼前に屹立して、手に取るが如く見えたり。これ、即ち、望遠鏡發明の時なりき。

この組立は、最も、簡略にして、その筒の短き所に、最も便あり。よりて、その用、最も多し。航海者、旅行者、大劇場を觀る者の携ふるもの、皆、これなり。その製、大抵、二筒を並べ、兩眼に、各、一筒をあて、以て、眼力の疲勞を防げり。故に、一般に、雙眼鏡と稱す。この望遠鏡、時としては、和蘭鏡と稱することありて、ながく、和蘭國の光を、學問の上に輝したるが、そのもとをいへば、實に、この小童子の功なり。(福澤諭吉文稿抄録)

八、ピスマルクの幼時

世に、英雄と呼ばれ、豪傑と稱せらるゝ人々の、言行は、往々にして、その常規を脱し、まゝ、常人の付り知り難きものあり。されば、世の人は、それら、英雄豪傑の士の偉業を見る毎に、皆、これをもて、その人の天稟の才に歸して、深く、その由る所を究めず、かへつて、こは、吾人の、到底、企て及ぶべき所にあらずと、思ひあきらむるが多し。こは、まことに、思はぬことの、甚しきものといはざるべからず。蓋し、英雄豪傑の士の、その才、常人

に超えたるは、その天稟に出でたる所もあるべけれど、かゝる人々が、その志を達して、英名を、世に轟すに至るまでには、皆、幾多の辛酸を嘗め、幾多の勉強を積み、始めて、然るものにて、その苦心のあと、また、頗る、常人に過ぎたるものあるなり。これ、まことに、われらの、心を留めて、學ぶべき點なりとす。

ビスマルクの如きは、その最もよき一例なるべし。世の人は、皆いへり、彼の學校にありし間は、少しも、讀書したることなく、たゞ、擊劍、争鬪のたぐひをのみ勵み、稍、長ずるに及びては、乘馬に耽り、喫烟に淫したる

に、その壯年に及びて、漸く、志を得、遂に、獨逸帝國創立の偉勳を建てたるもの、これ皆、風雲の變と、彼が天稟の偉才とによれりと。これ、まことに、ビスマルクを知らざるものといふべし。

ビスマルクは、シェーンハウゼンの一貴族なりしが、その家庭は、頗る、嚴格にして、彼は、いとけなき頃より、決して、他の貴族の子弟の如き、優長なる生活を許されざりき。六歳に達せし時、母は、彼を、ベルリンに送り、プラーマン博士の家塾に入學せしめたり。プラーマン博士の家塾は、全く、スバルタ流の教育にて、體

操の外に、游泳の課目もありて、過激なるまでに、體育を行へり。毎朝六時に、塾生は起き出て、七時には、教場に入らざるべからず。朝食は、一盃の牛乳と、一片のパンとを供ふるのみ。午餐には、パンに、鹽を添へたり。食堂に入りて、我が膳に供へられたる食物を餘す時は、これを食ひつくすまで、皿を捧げて、卓前に立たざるべからずといふ制裁さへありき。

嚴格なる家庭に、生長せりとは聞きしかども、もとより、貴族の子にて、ことに、纔に、六歳のわらはなれば、塾長は、ビスマルクの堪ふや否やを疑ひしが、彼は、すこ

しも、臆することなく、よく、塾生の體面を保ちたりとぞ。

いつか夏となりぬ。游泳の始るべき時は來りぬ。塾生は、この新來の小童を苦めむとて、樂みて、その日の來るを待てり。游泳所と定められたる、河の兩岸には、塾生と教師と、相並び立てり。すべて、新しき生徒は、一たび、教師より、水中に投げ入れられ、河の中には、また、多くの塾生ありて、これを苦め、以て、水になれしむるを例とせり。ビスマルクの、一たび、水中に投ぜらるゝや、深く、水中に沈みて、再び、その影を示さざりしが、志

ばらくして、彼は、前岸近く現れ、優然として、岸に上れり。人々、相顧みて、ことばなく、皆、その大膽なるに驚けりとか。これより、ビスマルクの名、塾中に高く、彼は、遂に、一方の首領として、仰がるゝに至れり。

粗暴にして、體力强きものは、多くは、學業に拙きものなり。さるを、ビスマルクは、教場に入りて、また、その聰慧なること、往々、儕輩を壓して、教師を感歎せしめしことあり。殊に、彼は、世界歴史を好み、希臘、羅馬の古英雄の傳記は、最も、その愛讀せし所にして、消えかゝれる殘燈の下に、ひとり、史書を繙いて、あらぬ妄想に

耽り、得々として、夜の更くるをも知らざりしこと、殆ど、連夜なりきといふ。

十七歳の時、グラウエンクrostel中學に轉じて、こゝにて、學士ボンチルといふ歴史科教師の信用を博し、朝に夕に、その居を訪りて、深く、歴史の研究に心を委ね、淳々として、少しも怠らず、平生の粗暴なるに似ず、書に對しては、常に、寢食を忘れたりといへり。これまことに、彼が一世の偉業を大成せし基にして、その事に當りて、裁決、流るゝが如く、奇策、縱横にして、その用意の周到なる、自信の強固なる、皆これ、歴史研究

の賜なりといはざるべからず。世に、天稟の才といふこと、なきにはあらねど、琢かざば、玉も瓦礫に等しからむ。ビスマルクが、我を折り、節を屈して、讀書に勉めたりし一事は、われらの、深く、鑑みるべきことにあらずや。

後年、彼が、國政に任じ、遂に、奥太利と戰端を開きて、旬日の間に、城下の盟をなさしめ、勳威赫々として、伯林に凱旋するや、舊師ボンチルは、當時、伯林中學の校長なりしが、この報に接して、欣喜、かく能はず、直に、ビスマルクを訪ひ、辭をあらためて、その偉勳を稱揚し、

「閣下よ、閣下は、嘗て、その愛讀せられたる、世界歴史の中に、今日は、みづから、壯快なる一節を記入せられしにあらずや」といへり。ビスマルクは、深く、その舊恩を謝し、靜に答へて、否、先生の贊言は、われの當る所にあらず。されど、多年の素志、こゝに遂げて、歴史研究の實を擧ぐることを得たり」といへりとぞ。多年、薰陶に従事せし舊師の喜、また、みづから、素志を遂げしビスマルクの愉快、見ぬわれらまで、心の動くを禁ずること能はざるなり。

九、余が劔術の修業

余の若き時、眞に、修業せしものは、劔術のみなり。余が家は、もと、劔術の家柄なりしかば、父も、特に、それを奨勵せり。余が師は、島田虎之助といふ先生なり。この先生、余に向ひて、當時、世間に行はるゝ劔術は、たゞ、形式ばかりなり、折角、稽古せむと思はゞ、眞正の劔術を稽古すべし」と、いはれぬ。余、その言に感じ、遂に、その塾に寄宿して、自ら、薪水の勞を取りつゝ、修業せり。

さて、寒中になるごとに、先生の指圖に従ひ、毎日、稽古の終るを待ち、王子權現に行きて、夜稽古をなせり。

何時も、まづ、拜殿の礎石に腰をかけて、瞑目沈思、心膽を練磨し、また、起ちて、木劔を振りまはし、かくすると、夜あけまで、五六回、さて後、かへりきて、直に、朝稽古にとりかゝれり。はじめのほどは、樹木森々たる社内のならひ、吹き來る風の音も、なにとなく、すさまじく、覺えず、身の毛もよだちたりしが、修業の積むに従ひて、次第に慣れ、後には、かへつて、さびしき中に、また、一種の趣あるやうになれり。

尤も、時々、は、二三の同門生の來りしこともあり。されど、いつも、寒さと、眠さにと、避易して、中途より、近傍

の農家に行きて、寝たりしが、余のみは、一度も、さることなまざりき。思へば、その時は、足袋もはかねば、羽織も着ず、たゞ、稽古衣一枚なりしかど、寒さといふことなどは、いかなることなるか、殆ど、知らざりき。今、この老年になりても、身體すこやかに、根氣も強きは、全く、この時の修業の餘慶なり。今の若き人々よ、暇あらば、劔術は、必ず、修業すべきなり。(勝海舟文稿抄録)

一〇、老廢兵 その一

ある日曜日のうらゝかなる日なりき。奥太利の首

府、維納のプラートルに於て、國民の大祭、行はれたり。プラートルは、その地に名高き公園にして、多く、茂樹、綠草を植ゑたれば、府民の、散策を、こゝに試みるもの、四時、ひきもきらず。ことに、今日は、大祭日の事として、市民は、老若貴賤の別なく、入り込み、その數、數千萬人に上れり。中には、外國の人なども雜れり。

、當時、維納府に、一人の憐なる廢兵ありき。歳々、受くる恩給の額は、すくなくして、その病軀を養ふに足らず、さればとて、たち居に不自由なる身の、足にまかせて、戸毎に錢乞ひあるかむ事もなりがたく、やむを得

ず、幼少の折、父より教へられし、手琴のあやしげなる曲を、道のほとりにかなでて、行きかふ人の憐を乞ひつゝ、その日を送りてありけり。

今日も、いかにして、こゝまでたどり來けむ、彼は、公園の片隅なる古木の蔭鬱たる蔭に、座を占めて、はや、破れたる手琴を抱きたり。傍に、一匹の犬ありて、口には、帽子をくはへたり。ゆきかふ人を仰ぎ見て、この中に錢投げ入れ給へ。このわが憐なる主人を助け給へ。といふが如き、わも、ちしてあり。されど、行人の無情なる、誰一人、顧みむとするものもあらで、帽子は、いつ

手琴引
かな

も、からのまゝにて、残れり。さても、この憐なる廢兵のさまは、いかにといふに、思ひのまゝに生ひ茂れる白髪は、長く垂れて、肩のあたりまで、かゝり、つやもなく、縞目もわかで、はては、ほつれし糸のあとさへ見ゆる、古き軍服の纒おろに、身を覆ひたる、心あらむ人には、一目見ても、憐憫の情とゞめがたかるべき様なり。げに、彼は、幾度か戰場に立ちて、いくその苦戦を重ねたり。手琴の弓もてる右手は、わづかに、三本の指を止めたるのみ。そが二本は、嘗て、敵彈のために飛ばされ、左の足も、また、たなじ敵彈のために打ち切られしなりとか。

心にまかせぬ不具の身を、辛うじて支へつゝ、あやしき音にかきならす、琴の音の悲しさ、されど、こは、遂に、都人の心を引くに足らざりき。

廢兵の顔の色は、今や、益、その光を失ひぬ。はかなげに、あたりを見やりつゝ、そこら集へる人々の、樂しげなる顔色を、うちまもりてあり。彼は、かくの如くにして、今日一日を飢ゑざるべからず。口に、一片のパンをも味はで、ねぼつかなくも、わがやぶれ家に歸りつかむこと、いかに堪へ難きかぎりならむ。やがて、彼は、眼をそらし、顧みて、わが愛犬を撫でぬ。眼には、いつしか、

涙の珠をやどしたりげに、憐は同じ境に、つき従へる犬のはかなげなるさま、これも、見るから、いぢらしきものにはあれど、さても、その主人にくらぶれば、犬は、なほ、多幸の方なるべし。歸らむ途上の、町々の隅には、彼の飢を醫するに足るべき、魚鳥の骨のなからずやは。

一一、老廢兵 その二

日は、はや、沈みはじめぬ。彼の望は、沈みゆく太陽と共に、空しく傾かむとす。力なげにかきならす琴の手

の、悲しき聲は、さびしき夕暮の雲にひゞき渡りて、悲痛の状、いふばかりなし。

この時、一人の、美しき衣着たる人ありしが、木蔭に身を寄せて、ゆかしき眼に、この憐なる廢兵を見やりつゝ、同情の念に得堪へぬさまなり。されど、廢兵は、それを知らざりき。今は、はや、絶望の極に達しぬ。さらぬだに、不自由なる身の、今は、飢ゑ疲れて、手さへ動かぬまでになりぬ。足も堪へ難うなりぬ。力なげに、傍の石の上に仆れ、慄ふ手に、額を押へて、ことばなく、坐りぬ。熱き涙の、頬を傳うて、芝生の上に、落ちたるも見ゆ。

木蔭に立ちたりし、かの紳士は、やがて、傍近く寄り來て、驚きて見上げたる廢兵の顔を、やさしき眼に、うちまもりつゝ、いかにも、堪へ難う見え給ふよ。われに、まばしの間、その琴、借し給へ、君に代りて、かなで參らせむと、鮮かなる獨逸語にていふ。何故とも知らぬど、そのことばの、いかにも、やさしかりければ、彼は、ことばなく、わが琴を、そと、その人に渡しぬ。

紳士は、ちかく、廢兵に寄り添ひて坐りしが、やがて、調子を調へたり。さても、その音のゆかしさよ、あやしき魔の、樂器の中に入りけむと思はるゝまで、妙なる

音の湧き出でしが、或は、秋風の松を拂ふが如く、或は、蟲聲の月に鳴くが如く、清くも、さやかに、ひきすまし、に、行きかふ人々、皆、耳をとめて、一人止り、二人止り、はては、潮の如く寄せ來て、この周圍を取り圍みぬ。美しき花車も、轆を止むるまでになりぬ。錢を投ぐるものも、一人二人出で來ぬ。これにつれて、われもわれもと投げ與ふる金銀の數、やうやうまさりきぬ。曲は、今、奥太利の國歌に移りゆけり。君が代の萬歳をことほぐ聲、妙なる樂につれて響き渡りしほどに、都人は、はや、狂じ始めぬ。群集の一人は、われにもあらで、聲ふ

り上げて、みづから歌ひ始めしが、群集、ひとしく、これに和するなど、その聲、滿園に響き渡れり。歌は終りぬ。琴の音もやみぬ。されど、群集歡呼の聲は、なほも、止まざりき。

彼の紳士は、そと、樂器を、廢兵に渡したりと見えしが、いつか、身を翻して、群集の中にまぎれ入りぬ。廢兵が、心からの謝辭をさげむとせし折は、はや、その影も見えざりき。狂するが如くなりし群集は、纔に、我にかへりぬ。かくて、彼の紳士の誰なるかを疑ひ始めぬ。「彼の紳士は、何人ぞ」との聲、そこゝに起れり。

やがて、一人の貴人は、そこに現れ出でぬ。群集に向
ひて、われは、彼を知れり。彼は、世に名高き琴の名手、ア
レキサンドル、ポーチエルなり。さても、彼の人のやさ
しさよ、われらは、彼のなさに酬ゆるところなくて
やはと、いひつゝ、みづから、廢兵のそばに寄り添ひて、
そが帽子を高くさゝげたり。人々の投げ與ふる金貨
は、幾度、帽子をかへても、なほ、はてなかりき。貴人は、そ
を、廢兵に渡し了へて、再び、群集に向ひ、高らかなる聲
はり上げて、ポーチエル萬歳と、叫びぬ。萬歳の聲、群集
によりて、三たび、くりかへされぬ。

廢兵は、涙と共に、よろめき立ちつゝ、仰ぎて、天を指
し、神よ、ポーチエルを守り給へと、祈りぬ。その聲は、か
すかなりしかど、心の底より湧き出づる聲の、さても、
力ありしよ。

一二、平壤の曲（中村秋香詠）

大砲小銃鬨のこゑ、

天やくづるゝ地か碎くる、

あなめざましや、

ねもしろや、

大浪翻して衝き入る皇軍、
雪類を打つてみだるゝ清兵。」
萬歳唱ふる勝鬨は、
山をうごかし谷をゆする、
あなこゝちよや、
いさましや、
平壤城頭けぶりのひまに、
ほのぼの見ゆる朝日の御旗。」

一三、臺灣日記 その一

十一月一日、午前六時五十分、わが一行は、雲林に向
はむとす。藤田軍醫正、雲林地方の土匪は、殆ど平ぎた
るも、なほ、潜伏するもの多からむ、力役者の雇徴に應
ぜざるは、なによりの確徴なり」と、いふ。大倉組の某、傍
にありて、紙幣を銀貨に交換せむとて、來り乞ふもの
志きりなり。かく、紙幣の通用を嫌ふは、土匪蜂起の前
兆なり」と、いふ。余、この兩説を聞き、各、その職によりて、
見るところ異なるも、歸するところ一なるを知れり。城
門外にて、守備隊、たよび、他將校と別れ、憲兵に護衛せ
られて發す。午前十一時十五分、北斗橋を過ぐ。約五十

米突、わが工兵の築けるところなり。

北斗は、彰化を南に距ること約七里、薊洞巷を北に距る約三里にある一市街なり。戸數九百七十三、人口四千二百八、濁水溪に近く、土砂平亘、砂地にして、排水わろく、常に、臭氣あり。井水不良、健康の地にあらず。去ぬる六月、土民蜂起、雲林、守を失ふや、席卷の勢を以て、この地を襲へり。守備隊長大尉宮永計太、奮戦、創を被れども屈せず、猶、奔走指揮せしが、第二創を腹部に受け、遂に、斃れたり。今、兵に導かれて、その處に至り、佇立や、久しくして、去る能はず。宮永は、越後長岡の人、膽

勇、人に超ゆ。余と同縣人、つねに、望を屬せしが、果して、この死あり。

午後五時三十分、雲林に達す。この地、曩日の戦のため、兵燹にかゝり、土人だに、なほ、住むに家なし。いはむや、屯兵をや。寺院、若くは、民屋と稱するも、多くは、戸なく、床なく、假設の兵舎と稱するも、檳榔樹と竹とを用ゐて、いとなみたるものなれば、脆弱にして、かつ、粗なり。その兵の困難と、土人の困難と、一見、人をして酸鼻せしむ。

十一月二日、朝、守備隊長來り、この地、土匪潜伏の虞

あり、警戒せられよ」といふ。午前七時、この地の諸氏に、別を告げて發す。原野田圃を過ぎ、行くこと二里、他里霧にて小憩す。この地のある富豪、昨夜、土匪のため、襲はれたりとのことなれば、その家に行きて聞くに、「土匪十餘人來りて、戶外より金をいだせよといふに、固く、戸を鎖して應ぜざりしかば、はては、屋上に登りて、屋瓦を破り、石炭油に火を點じて、寢室の上に灌ぐなど、危険いふべからず。こゝに、やむを得ず、金若干を與へ、漸く、去らしめたり」とて、涙を拂ひつゝ、語れり。土匪の富豪を襲ふもの、大概、この類なり。もし、金をけれ

ば、主人、又は、愛兒等を奪ひ去る。その去るに臨みて、金何百圓を、幾日まで、何處まで、携へ來れ、期を誤らば、殺さむのみと、いひのこすを例とすといふ。こゝを發し、十一時、大林甫を経て、午後四時、嘉義に達す。

一四、臺灣日記 その二

十一月三日、午前二時、起床、野田氏と共に、樓上に發車の報をまつ。時に、岡少佐來りていふやう、夜來、西門南門の外に、遙に、銃聲二百發ばかりを聞く。守備隊より、偵察をいだし、が、未だ、歸らず。さらに、憲兵をいだ

しやりたれど、それもかへらず。やむをえず。發車時刻を延ばせり」といふをりしも、また、二三の銃聲を聞く。暫くして、鷄聲、曉を報ずるも、偵察、歸り來らず。四時半、岡少佐と謀り、たとひ、いさゝかの賊あらむも、護衛あらば、何かあらむとて、城門外の輕便鐵道停車場より發す。十二時、曾文溪に達す。溪流、幅、わよそ、三十米突、水濁りて深し。工兵架するところの假橋は、往日の出水のため、落ちたりとて、今日は、船にて渡す。前岸に達するや、守備隊長伊集院少尉、并に、岡三等軍醫、來り迎ふ。導かれて、曾文溪村に至る。頗る、要害の地なれども、

戸數僅に、二十餘戸、屋宇、みな、狹小、陋隘、大なるものも、一戸、五六名ならでは入りがたく、壁落ち、屋漏り、辛うじて、雨露を凌ぐのみ。本日は、天長節なり。各、舍を巡り見るに、屯兵は、紙を赤く染めて、櫻花を造り、又は、紙にて、旭旗を造りて、青竹につけ、戶外の庭上にたて、以て、祝意を表するなど、忠君の情、感ずるにあまりあり。午後一時三十分、又、輕便鐵道にて、この地を發す。七時、臺南なる宿舎、憲兵本部の樓上に着す。

十一月四日、旅團司令部に至り、まづ、第一に、去年十月、北白川宮殿下が、御病臥あそばされたりし御寢室

に案内を乞ふ。比志島旅團長自ら導く。司令部の左方の一室に注目繩をはり、北白川宮殿下御寢所と記したる札あり。錠を開きて入れば、方二間四方の室、二間あり。その奥の間に、古き御寢臺あり。殿下が御危篤まで臥させられたりしものなり。その次の間に、竹製の急造檐架一個あり。これぞ、御病中、嘉義地方より進ませ給ひし途次、召されたりしものなる。木村軍醫監が話に、殿下は、檐架中に、毛布をかつかせられて、臥させられながら、九十度、九十五度の暑さに、細き村道を進ませられ、折々、參謀を召させられて、重き御頭をあげ

させられ、戦況を聞き召し、それぞれ、御指揮あそばされつゝ、進ませられしよしなど語りしを聞きしが、今、そのことを思ひいでて、こを拜するに、涙、落ちきてとどまらず。たゞ、無言にて退きぬ。

十一月七日、早起、旅装を整へ、午前六時、輕便鐵道に乗じて、鳳山に向ひて發す。この鐵道も、わが軍にて敷設せしものなり。同八時、鳳山に達す。恰もよし、こゝに居るところの第七第九兩中隊は、今朝、土匪討伐のため、出發せむとするところなり。余は、志ばし、舍外の空地に立ちて、そを見送れり。この兵、去年來、渡臺した

るもの半、また、近く、交代し來れるもの半なり。昨年より留るものは、いづれも、炎熱とマラリヤとのために、顔色蒼暗、肉落ちてあり。余は、一見して、わが同胞が、新領地を保護するに、かくまで、辛苦するかと、そゞろにかなしく、この實況を、内地の人にも、見せまほしくたぼえたり。この際、最も、心に感じたるは、兵士の食饌なり。中隊長の言に、今日は、特に、食饌を盛にして、出陣をいはへりといふ。その食饌を検すれば、飯の外に、牛肉と芋との煮付一種、魚と野菜との煮付一種、ジャボン一切、香の物四切なり。即ち、通常の午飯に比すれば、唯、

一種の煮魚と、ジャボン一切とを増加せしのみなり。土匪討伐に赴くや、いつも、負傷者なきはなく、又、いつも、酷厲なるマラリヤに侵されざるはなし。この行、その災は、誰も誰も、期するところ、而して、その出陣をいはへる食饌は、かくの如し。この日記を讀まむ人は、ここに、一滴の涙をそゞろも可ならむ。(石黒忠憲著臺灣日記)

三期

一五、電信局開業式の祝詞

近年、諸般の發明、甚だ多しと雖も、その大發明中の、最も、大なる者は、電信の右に出づるものなからむ。何

を以て、これをいふ。發明の功、最も大にして、その費、最も少ければなり。蒸氣機關、甚だ便利なり。瓦斯も、また、甚だ便利なり。されど、その便利と費用とを比較する時は、電信に向ひて、三舍を譲ることならむ。

電信局の年報によれば、わが日本に、電信を用ゐたるは、明治二年八月、横濱の燈臺寮より、裁判所にいたるまで、七町を架したるを權輿とし、同年十二月には、東京築地の海關より、横濱の裁判所へ、八里一町を架し、同三年八月には、神戸大阪の間に十里を架し、東京長崎の線は、明治六年に落成し、箱館への通線は、七年

十月に落成せり。その前後、東京、大阪等の市中にも、縦横に、支線を張りて、創業以來、明治八年六月三十一日に至るまで、線の長さを總計すれば、千七百六十三里、八年七月より、九年六月に至るまで、一週年音信の數、六十一萬二千なりといふ。

今、この電信の功用を尋ぬる人あらば、その答には、千七百里の路程を縮少して、無に歸せしめたりともいふべく、又、日本人の身體を、延大にして、千七百里の各地に跨らしめたりともいふべからむ。いはむや、海外諸國との通線あるに於てをや。吾に、日本のみなら

ず、全世界を縮少して、これを掌の中に弄ぶといふも可ならむ。

電信は、國の神經にして、中央の本局は、腦の如く、各處の分局は、神經叢の如し、日本國中、新に、この神經の系統を創造したるものなれば、百般の人事に、穎敏を増すは、論なし。神經の穎敏なるがために、形體も、共に、活潑力を得るに至れり。その功の大なる、瓦斯、蒸汽等に優るあるも、讓る所なからむ。

又、その費用はいかにといふに、創業より、明治九年六月三十一日まで、費額の共計二百二十七萬一千圓

にして、收額四十一萬五千圓なり。これを、他の工業に比して、費額、多からず。收額、亦、少からず。又、明治八年一月より、九年六月に至るまでの間には、新に、線を架したる事も、少くして、八年一月より、六箇月間の音信數をば、八年七月より、九年六月に至るまで、一年間の音信數を半折したるものに比較すれば、音信の數を増したること、凡そ、十萬にして、收金、凡そ、一萬二千圓を増したり。これによりて、これを見れば、人民の、次第に、電信を利用する事の多くなりゆくは、事實にして、これをを用ゐることの、愈、盛なれば、局の收額も、次第に、増

すこと、明なり。思へば、その費用、最も、少きものにあらずや。

今を去る事十三年、慶應寅年、諭吉が著したる西洋事情に、電信功用の大畧を挙げ、西洋諸國には、電信といふ一種の奇機ありて、遠國に音信を通じ、その神速なる事、千百里にても、瞬くひまに通ずるよしを記したり。その時には、世間にも、これを信ずる者なく、著者も、また、敢て、これを、直に、日本國に施さむとする意なく、唯、彼の國にて、目撃したるまゝ、を記して、世上に示し、百歳の後には、また、これを、實地に用ゐる事もあら

むかと、おもひしまでにて、生涯の中に、日本にて、電信の實物を見むなどとは、夢にも、想像せざりしことなるに、十三年の今日にいたりて、親しく、この盛會に陪するを得たるなど、諭吉が心に、わいては、恰も、百三十年の想像を、十三年の實際に見たるが如き感あり。人事の進歩、實に、驚くに堪へたり。既往、かくの如し。將來、推して知るべし。感喜のあまり、鄙辭を呈して、謹みて祝す。(福澤諭吉文稿抄録)

一六、外國人の勤勉

余、英京倫敦にありて、東京の一友人のもとへ、書信をわくれり。その中に、かの國の人の動作を記して、「よく働き、よく遊ぶ」といひしが、今、歸り來て、かれとこれとを比較するに、更に、その差の甚しきものあるを感ぜり。

かの國の人は、日々、職務に従事するに、豫め、時刻を定めねば、その時いたれば、場にのぼりて、拮据、勉強、また、餘念あることなし。かくて、退散の時刻を報ずれば、猶豫することなく、机を蓋ひ、手を洗ひて、家に歸りぬ。かくて、直に、服をぬぎかへ、外出するを例とするが、い

づこへ行くかと思れば、園池に赴きて、釣を垂るゝもあり。河流に出でて、扁舟を浮ぶるもあり。或は、車を馳らするもあれば、馬に乗るもあり。或は、芝生の上に球を擲つもあれば、舞樂場に入りて、樂器を玩ぶもあり。或は、朋友をたづぬるもあれば、親戚をわとづるゝもあり。かく、十分、遊びくらしして、後、家に歸りて、晚餐を喫するなど、出入、動止、時刻のさだめありて、一屈一伸、一弛一張、すべて、そのよろしきに適せり。尤も、出入の時刻、動止の寛嚴は、社會の貴賤と、職業の高卑とによりて、同じからず。かの工場に出でて、日々、銀錢を得るも

のは、晴雨寒暑を問はず、就業の時限、九時間乃至十時間にして、通例朝七時に始めて、夕の五時又は六時に止む。その規程のととのへる、その約束の行はるゝ、實に、讚賞に堪へざるなり。

今、わが國人の事を執るを見るに、更に時限の規程を踐むことなく、その勤むべき時に勤めず、憩ふべき時に憩はず、その懶惰遲鈍、不規不正なること、朝野都鄙を問はず、士農工商を論ぜず、大約一轍なり。そのうち最も甚しきを職人とす。彼等は、その工場に臨むや、火を焚き、煙草をのみて、容易に着手せず。その業に就

くも、遲鈍にして、戯るゝが如く、空談、雜話、空しく、時刻を消し、約にそむきて、耻とせず。かの「染職の明後日」といふ諺あるも、亦、宜なり。さて、又、家に歸りても、勞を慰め、身を樂ましむることを知らず、或は、飲食を恣にし、或は、睡眠を妄にして、攝養の法をだに省みず。かの朋友をたづね、親戚をれとづるゝが如き、高尚なる樂に至りては、また、問ふべきかぎりにあらざるなり。

抑も、個人にありては、出入、度なく、動止、時なきも、小事に似たり。されど、これを、一都府、又は、全國にしては、その利害、甚だ、大なり。かの西人が、一國の貧富、盛衰を

トするに、人口の多寡を以てするは、これ人多ければ、業もまた盛なるによるなり。さはいへ、人すくなきも、よく働かば、一人にて三人の業を営み得べく、人多きも、怠惰ならば、三人を合せて、一人の功に及ばざるべし。されば、わが國の如きは、未だ人口の多きを以て、誇るべからざるなり。(大鳥圭介文稿近世名家文鈔抄録)

一七、東京その一

武藏野と呼びし、遠き昔は知らず、覇府の地となりてより、三百年の星霜を経、今また、茲に、今上天皇、都を

奠め給ひてより、三十餘年の月日を重ねて、民草は、繁りに繁り、榮えに榮えて、今や、まことに、東洋一の大帝京たるに、耻ぢざるに至れり。

地勢は、西南は、丘隴、あひ連れども、東北は、概ね、平坦なり。西南の丘隴、あひ連れるところを、山の手といひ、東北の平坦なるところを、下町といへり。麴町、麻布、赤阪、四谷、牛込、小石川、本郷は、山の手に屬し、神田、日本橋、京橋、下谷、淺草等は、下町に屬せり。下町は、江戸開市の後、夙に、市井をかたちづくりて、繁盛を極めたれども、山の手は、武士屋敷、その大半を占めたれば、なべて、物

寂しきさまなりしが、維新以來、次第に開けて、多く町家たちつゞき、大に面目を革めぬ。されど、地勢もと、偏陬にありて、交通の便、割合に宜しからざれば、盛に、商業を營まむとするものは、大かた、下町に住み、官吏、會社員の如きは、寧ろ、その靜閑なるを好みて、山の手に住めり。

かくの如く、山の手と、下町とは、地勢の上より、自ら、區劃せらるゝのみならず、住者の多數、異れば、従うて、風俗も、また、異るところあり。下町は、風俗の變遷、特に劇しく、時々、流行、一にこゝに基を發し、山の手は、常

に、これを追はむとする傾あり。都市の端々、隅々を、場末といふ。多くは、細民の住めるところなるが上に、域郷曲に接すれば、風俗、稍、鄙陋にして、田舎じみたり。

街坊は、四通八達にして、大街小巷、縱横交錯す。俚俗に、京都は、碁盤割、江戸は、阿彌陀割といへども、地圖を繙いて見れば、その紛錯せること、阿彌陀割の比にあらず。殊に、武士屋敷、いよいよ、開けて、新道、いよいよ、通じ、ますます、その紛雜を極む。古は、八百八町と呼びしもの、今、千三百八十餘町と算するに至るなど、また、交通の便の、日に進むを見るに、足らずや。通衢も、必ずし

細民貧家
鄙陋

も、正直ならず、迂曲して、北し、西し、或は、東し、南す。されば、都人は、常に、東西を以て指さず、左右を以て辨ぜり。下町は、すべて、平坦なれども、山の手は、丘陵起伏するが故に、坂路、また多く、騎乘に艱むこと、少からず。いづれも、通衢は、幅、潤けれど、その最も廣きを、上野、淺草の兩廣小路とす。その整へるは、京橋の銀座通にして、一條の大道を劃して、中央を車道とし、兩側を歩道とす。歩道は、あまねく、瓦磚を舗きつめたれば、雨天にも、行潦の憂なし。かつ、柳を栽ゑ列ねたれば、炎暑、燬くが如き日にも、樹陰の清涼、掬すべきものあり。

絡繹

されど、市街の一斑は、清潔なりといひ難し。比屋の高低、一ならず、軒並、また、不揃にして、齊はず。常に、人馬絡繹して、道、さながらに悪しく、加ふるに、この地、もと泥土にして、砂礫に富まざれば、例へば、潮水退きて、海底の干上りたらむが如く、日照れば、乾いて、塵埃揚り、雨降れば、泥濘、糊を溶すに似たり。殊に、風烈しき日には、塵埃、天地を晦らし、草木、これを被りて、緑ならず、往來の人は、眼を開くに堪へず、衣裳、また、染みて、黝色となることあり。

一八、東京その二

都下の區々、殆ど、一市の姿をなさざるはなく、一區、概ね、一二箇所ところの盛場所さかばあり。そこには、飲食店あり、勸工場あり、寄席あり、玉突、大弓等の店ありて、常に、熱鬧を極む。例へば、上野、淺草の兩廣小路、京橋の銀座通、神田の小川町通、麴町の麴町通、牛込の神樂坂等の如き、これなり。

公園も、京橋、麻布、赤坂、神田の四區を除く外は、各區に、これなきはなく、明治六年三月、上野を以て、これに充てしより、漸くに増して、今、十六箇所あり。即ち、下谷

には、上野、下谷の二公園、麴町には、麴町、平河町、清水谷、日比谷の四公園、芝には、芝、愛宕の二公園、淺草には、淺草公園、深川には、深川公園、日本橋には、坂本町公園、六所には、綠町公園、本郷には、湯島、根津の二公園、小石川には、白山公園、牛込には、高田公園あり。就中、境域の最も廣大なるは、上野公園にして、十六萬九千百餘坪あり。これに次ぐは、芝公園にして、十四萬六千二百餘坪あり。一は、古の東叡山、一は、増上寺の地にして、共に、徳川氏の靈廟のあるところなり。

上野公園は、不忍池を擁して、風景絶佳、春時、櫻花を

以て、いちじるしく、博物館、動物園等、また、この域内に
 あり。博覽會、美術會、園藝會をはじめ、諸多の展覽會、こ
 もごも開かれ、四時、遊覽の客、みちみてり。芝公園は、増
 上寺山門の邊、青松たほく、朱門、翠影、相映射し、頗る、幽
 趣に富む。丸山の上よりは、東京灣を望み、碧波、浩蕩の
 中に、風帆の出沒するさま、自ら、胸襟を潤うす。淺草公
 園は、淺草寺の地にあり。觀音閣は、殿宇壯麗、丹碧、こも
 ごも輝き、薨楹、頗る、壯なり。都人の賽詣、星を趁りて雲
 聚す。仁王門前より、雷神門の跡に至る間、仲見世と稱
 へて、兩側の煉瓦造の華舗、道を挾みて、軒を列ね、多く

天所命
 園藝會
 美術會
 朝野

花壇
 花壇

は、簪笄、木偶、玩具、菓子、煎餅、あるは、錦繪、繪草紙の類を
 商へば、見世棚の、新を列ね、奇を飭り、艷美を競うて、行
 人の眼を奪ふこと、一場の花壇に似たり。子は、すねて、
 親にねたり、嬢は、袖を引いて、母に求む。賽客も、旅人も、
 この處に、手土産を購むるなど、殊に、雜沓を極む。奥山
 は、古より、百戲、競ひ集り、見世物、興行物の奇を鬪はし
 しが、今に至りて、いよいよ盛に、士女駢闐、觀るもの、堵
 の如し。その他、近郊には、飛鳥山、王子、道灌山の三公園
 あり。いづれも、勝境にして、杖を曳く遊客、常にたえず。
 都下の戸口、歳を逐うて増加し、明治二十九年十二

月の調査によれば、戸數二十九萬八千九百〇二戸、人口百三十六萬五千〇六十八人、中に男七十四萬二千七百八十七人、女六十二萬二千二百八十一人あり。これを前年に比するに、戸數に四千四百四十六戸、人口に二萬五千三百四十二人を加へたり。もし、それを人口を以て、全國の市邑に比すれば、京都、大阪、名古屋、横濱の四市を一にして對するも、猶これにたよばず。また、盛ならずや。（平出鏗二郎著東京風俗志）

一九 土地と植物

御身等、汽車に乗りて、長き旅行をなし見よ。至るところ、山送り、水迎へ、原野行き、森林來りて、その景色の異なるものあるを、たぼえむ。こは、山容水相、自然の地形に基くは、もとよりなれど、また、そこに生ふる草木が、さまざまの趣を添ふるにもよるなるものよ。

今、東京より、直江津行の汽車に乗り、武藏、上野の平野を過ぎ、高崎に至りて、左に折れ、妙義の山の麓に沿ひ、横川の驛に達せむか、この間のながめ、東京附近と、更に、かはるところなく、別に、目をひくものもなからむ。されど、その驛より、齒輪軌道により、碓氷の嶺を上

り、輕井澤に至らむか、氣候の俄に變ると共に、野生植物のありさま、又大に、そのたもむきをことにせむ。ことに、盛夏の候、野に、原に、百花の咲き亂るゝなど、東京附近の春の景色に同じからむ。さて、これより、更に、道をかへて、下野なる日光山に遊び見よ。東照宮の廟ありたりは、老杉、枝を交へて、晝なほ、くらきをねぼえむ。馬返に至り、急坂を攀ぢ、中禪寺に達せむか、湖畔、一帯の山腹には、落葉木たほく、その若葉の時の如き、緑、滴らむともいふべからむ。また、男體山に登らむか、白根山の麓に至らむか、もみ、からまつ等の針葉樹の密林、暗

黒鬱蒼として、遠きところよりも、猶、それと認め得らるべきなり。また、赤沼が原などには、みづこけの生ひ茂れるのみならず、高原固有の草花たほく、夏時に至りて、一時に、花開くなど、原頭、恰も、一大花苑のあらはれしが如きたもひあらむ。

御身等は、この旅行にて、各地の植物の、たのづから、かはりあるを知りたらむ。されど、なほ、これらの地方は、本邦の中土にして、互に、相距ること、遠からざれば、さほどの差異もあらざるなり。更に、船に乗り、北の方奥羽より、津輕海峽を渡りて、北海道に入らむか、本邦

中央部の低地に普通なる草木、并に固有の竹類を見ず、かへりて、中央部の山地にある草木の、一般平原に生ふるを見るならむ。なほ、北行して、千島群島に至らむか、植物帶、全く、かはりて、寒地固有の風景をあらはし、一木一草、皆、目なれざる心ちするも、奇といはゞ、また、奇といふべからむ。さて、更に、行を轉じて、本邦西南部に向ひ、中國より、四國をへて、九州に入らむか、植物帶のありさま、全く、前とかはり、暖地固有の植物、即ち、にくけい、くすのき、あかう、やまもゝの類のみ、多からむ。これより、南の方、琉球諸島に至らむか、ばせを、そて

つ、びろうの類、ことに、よく、生ひたち、猶、南の方、臺灣に至らむか、椰子、木生羊齒の類、生ひ茂り、風光、殆ど、熱地植物帶のありさまをあらはさむ。

かく、北の方、千島の、えーらんたい、はなごけの如き、寒地植物帶より、南の方、臺灣の、羊齒の天然林にいたるまで、その發生をほし、いまゝにするは、わが版圖の、南北に延長して、廣袤數千里、氣候風土地によりて、大に、かはればなり。御身等、北の方に生れたるか、南の方に行きて、その有様を見よ。御身等、南の方に生れたるか、北の方に行きて、その景色を見よ、その差異、實に、こ

ここに述べたるものにはかぎりざるべきなり。

二〇、山家(小出繁詠)

垣根のかはに、	魚	躍り、
軒端の山に、	鳥	あそぶ、
浮べる雲は、	か	へりみず、
求めぬ富も、	あ	まりあり。
峯にはひらく、	花	のまゆ、
岸には撫づる、	苔	のひげ、
つきせぬながめ、	山	ふかく、

浮世のたもひ 水あはし。

二一、田舎人の話

ある田舎人物買はむとて、東京に来てけるが、歸りて、その郷人にいひけらく、東京は、聞きしにも似ず、もの買ふ事の、たよりあしきところなり。紙屋は、南の町にあれば、筆屋は、西の巷にありなどして、茶、煙草、臙脂、白粉の如きものまでも、一品毎に、商ふ家のかはりぬるゆゑ、日毎に、あさりあるきて、からうじて、この物どもは、買ひて來ぬ。こゝなる萬屋は、田舎なりとて、侮り

居しが、往きて見給へ、これらの品々は、さらなり、炭、薪にもあれ、笠、草鞋にもあれ、一つ家にて、心のまゝに買はるゝを」と、さかしげに、いへるも、をかし。こは、この萬屋を、ひとつ物もてなりはひすべくもあらぬ、えせ商人とは、思ひたらぬ故なり。されど、物買はむには、さてもありぬべし。身を立てむためにとて、學問する人の、ひとつ技に、心留めず、この田舎店に似たる者の多きは、いかにぞや。(那珂通高文稿洋々社談抄録)

二二、 普通文の話

學問は、何の學問でも、無用のものとしては、あるまいけれど、その中にも、作文ほど、必要のものはなからう。孔孟の道德も、釋迦、基督の宗教も、經典の文がなければ、世にひろまらず、國家の頹廢、政治の得失も、歴史の文がなければ、世に傳らず、他所の親類、遠方の朋友も、書簡の文がなければ、安否を問ふことが出來ず、物品の賣買、金銀の貸借も、證書の文がなければ、取引が出來ぬ。この通り、文章は、日常必要の物なれば、なるたけ、衆人に讀み易く、意味の、能く、分るやうに書くがよい。

よかるに、専門の學者達は、ちよつとまたことにも、とかく、故事を引用し、古言に模擬し、一種高尚なる技術として、これを弄ぶ癖があるが、それは、たゞ、文人社會のこととて、世間普通

の日用の文とは、別問題である。それならば、世間普通の日用の文は、どういふ鹽梅に、書くのかといふに、先づ言文一致を目あてにして、現今世に行はれて居る、和漢混交の文に、修正を加へて、筋立つやうに書けば、それにてよろしい。

それで、ひとつ、ことわつて置かねばならぬのは、いかに、言文一致だからといつて、たゞ、話すことばを、そのままに、すぐ、文にするといふことは、避けなければならぬ。現に、今の文士の言文一致の文章には、随分面白く、達者に、筆の廻つて居るの**イイ**はあるけれど、とかく、前後の接續などに、注意しないのが多い。また、起結や、語格なども、さつぱり、構はぬのが多い。語格といふ様なことは、もと、古文の格だから、言文一致の文や、普

通
さしすせす
すん何よあやふし
上へん

通の文には、必要がないといふ輩もあるが、これは、間違つた論で、いくら、言文一致だからというて、既に、文といふ以上は、過去や、現在の區別がなくて、は、その意味も通ぜぬといふことは、心得ねばならぬ。また、起結、接續といふことも、大切な事で、これに、注意しなければ、文としての價值がないといふことは、心得ねばならぬ。

また、口語を寫す時にも、注意せねばならぬ。同じ口語にも、品の善い詞もあるし、品の悪い詞もある。例へば、いふも、まをすも、ぬかすも、いやあがるも、皆、同じ義なれど、ぬかすといやあがるとは、品の悪い詞で、まをすは、敬意を表した詞である。又、れどろくも、たまげるも、びつくりも、共に、同じ意味なれど、

びつくりは鄙言であるやうなものである。又、一地方に限られて居る方言と、國中一般に通用せられて居る普通語とがある。又、土地によりて、發音の違ふ所がある。東京の人は、ひととを混じ、奥州の人は、しとすとを混じ、薩摩の人は、ひとふとを混ざる。これらは、よく注意して、なるべく普通の詞、普通の音を用ゐるがよい。勿論、鄙言、方言等を、一切文中に入れるなといふてはない。その文の目的によりて、特に、鄙言を必要とし、方言を用ゐなければならぬ場合もあるから、その場處がらによつては、これを用ゐても、構はないが、普通の時には、なるべく、詞がらを擇び、同じ口語の中でも、わかりの善く、品の善い詞を用ゐるがよい。要するに、普通文は、廣く、人に讀ま

しむるものといふ一言を忘れてはいけな。 (川田剛演說筆記)

二三、 一壺千金

古人の語に、中流失舟一壺千金といへることあり。俄なるをり、身の危き事を、免るべきものあらむには、その物は、賤しとも、その效用につきては、千金の價も、貴きものにはあらざるべし。

いつの頃にかありけむ、東都の大火に、老若男女四方に逃げ迷ひける折しも、夜嵐つよくして、火屑は、雨の脚よりも繁く、濃き烟、渦捲きて、面を向くべきやう

もなかりけり。爰に、一人の男、百兩の金を手にして、逃げけるが、また、一人の男の、一枚の夜具を、頭に蒙りて、逃げ行くを見て、羨しくや思ひけむ、その夜具、買はむと、いひかくれば、幾何の價に買ふと問ふ。百兩に買はむと、いへば、然らば、賣り申さむとて、夜具を渡し、百兩の金を引き攫み、兩人、先を争うて、逃げたりしが、夜具持てる男は、これにて、煙と火屑とを防ぎ、からうじて、逃げ延びたれど、百兩の金持てるは、煙に捲き籠められて、息もつかれず、そのまゝ、斃れて、遂に、茶毘一片の煙となりきとぞ。夜具一枚のかほりに、百兩ををしま

百兩
 買はむ
 幾何の價
 に買ふ
 と問ふ
 煙と火屑
 とを防ぎ
 からうじて
 逃げ延び
 たれど
 百兩の金
 持てるは
 煙に捲き
 籠められ
 て
 息もつか
 れず
 そのまゝ
 斃れて
 遂に
 茶毘一
 片の煙
 となりき
 とぞ

ざりしは、善く、生命を惜むものによあらむ。(細川潤次郎 著なゝしぐさ)

二四、諭言五則

鹿の兒あり。母に隨ひて、出でて遊ぶ。騎して、弓を手にし、矢を負へるものに遭ふ。母の曰く、汝、かの肩上にあるものを知るか。飛びきて、身にあたる時は、必ず、死せむ。汝、急に、これを避けよと。鹿の兒、首をふりて曰く、兒は、その飛び來る、果して、何の状をなすかを試みむとて、母の去るにも去らず、遂に、矢にあたりて死せり。

翔神願同

世には、頑にして、教に従ふことを知らず、往々、かくの如きものあり。

一小猴、人の髭を剃るを見て、刀を偷み、これに擬して、自ら、その鼻を傷く。世の習はずして、事に従ふもの、多くは、この類なり。

一貧兒あり。菌を探りて歸り、その母に誇りて曰く、「阿母の探るところは、常に醜し。兒は、その蓋の眞珠の如くにして、その欄の、臙脂の如くなるものを獲たり」と。母、これを見て、嘆じて曰く、「これ、毒ありて、食ふに堪へざるものなり。兒、それ、これを誡めよ。外、美なるもの

は、その中、たほく、毒を藏するものなること、ひとり、この菌のみにあらず」と。

栗鼠、樹を攀ちて、胡桃を摘み、その皮を噛み破り、齧蹙して曰く、「何ぞ、その苦きや」と。既にして、核に及ぶ。乃ち、笑ひて曰く、「まづ、にがきを喫せずば、安ど、この滋味を得ることあらむ」と。

一農夫あり。兒を携へ、出でて、麥の熟せりや否やを檢す。兒問ひて曰く、「この麥の穂を見るに、或は昂く、或は俯す、孰か貴き」と。父、ふたつながら、その穂をぬきて、これに喩して曰く、「内、充實すれば、必ず下る。かの、昂然

として、屈することを知らざるもの、如きは、皆その未熟なるによりてなり」と。(那珂通高文稿洋々社談抄録)

二二五、 老いたる獅子

獅子あり。久しき間、暴威を逞しくせしも、今は、年老い、力衰へて、穴の前に、空しく、死を待てり。嘗ては、そが前に、懼伏して、おち畏れたりし獸等、いま、このさまを見て、たれひとり、憐と思ふもの、なきのみか、このれをろしき梟雄の、ひさしからずして、世を去るべきを喜びあへり。ことに、一二のものは、この衰餘の讐敵に

向ひて、多年の恨をはらさむとせり。やがて、ひと群の獸は、かの穴のそば近く寄りきぬ。狡猾なる狐は、さも、憎さげなる口調にて、頻に、嘲弄のことばを放ちしが、狼も、また、大聲あげて、さまざまに、嘲り罵れり。角を以て、突きかゝる牛あり、牙を以て、傷くる野猪あり、なまけもの、名高き驢馬すらも、彼のそば近く寄りきて、その蹄にて、頻に、蹴たり。中に、一疋の馬あり。これのみは、その側に立ちて、たゞ、うちまもりてあり。この馬の母こそ、嘗て、この獅子の爲に、裂き殺されしものなりしかば、皆、怪みてありしが、やがて、驢馬は、馬に向ひて、

「君は、何故に、讐を報ぜむとはせざる。彼が耳のあたり、蹴やり給はずや」といへば、け高き馬は、容をあらためつゝ、われは、それを、卑劣のきはみと思へり。はや、われわれに、何の害をも與へ得ぬやうになれる敵に向ひて、復讐せむこと、いかにも、心なきまわざならずや」といふに、驢馬をはじめ、他の獸等、皆、顔を赤めて、逃ぐともなく、逃げ去れり。

二一六、動物の保護色

動物の彩色は、なにか、特別のいはれあるにあらざ

るかぎりには、まづ、その住居する周囲の彩色に似るを、例とするなり。こは、他の動物の攻撃をまぬがるゝために、たよりよきのみならず、たのれより進みて他の動物を攻撃するにも、たよりよければなり。例へば、草木につき居る昆虫の、その常に、葉にとゞまるものは、綠色にして、その幹に居るものは、褐色を帯ぶるが如し。すべて、北極地方に住む動物は、白色を帯び、沙漠地方に住む動物は、褐色を帯び、熱帯地方の、常に、綠色なる林中に住む動物は、多く、綠色を帯ぶ。かくて、同じ北極地方にても、終歲、雪あるところに住む動物は、四時

白色なれども、夏時、雪消ゆる土地に住む動物は、たゞ、冬のみ白色にかはるなり。北極狐、北極兎の如き、これなり。わが國にても、北部の、雪多きところに住む兎は、冬期、必ず、白色となり、御嶽、乘鞍の如き、深山に住む雷鳥は、冬期のみにかぎりて、白色にかはるも、皆、同じいはれなり。彼の尺蠖の如き、その數の多き割合に、われわれの日に觸れざるは、そのありさまの、よく、棲息するところの樹木に似たればなり。ことに、雨蛙の如きは、その周圍の物色のかはる毎に、その體色をかふること、甚しく、その、綠葉にある時は、綠色を帯び、幹上に

ある時は、褐色をなせり。動物學者は、これらを名づけて、動物の保護色といふ。

二七、白羽の雀

むかし、ある田舎に、一農夫の、極めて、朝寢なるが、ありけり。性質、まことに、溫厚にして、親より讓られし田地も、少からざりしかば、始のほどは、人にも親まれて、いと安らかに、その日を送りけるが、資産、いつか傾きて、今は、中々に、貧苦を覺ゆるやうになりぬ。家畜は、なにとはなしに、日々に、仆れ死に、田畑の收穫は、思ふ半

なにもぬぬぬぬぬ

にも達せず、そこゝの負債は、いつか嵩みて、はては、貸主どものせめかけきて、罵る聲、連日、絶えずなりぬ。そのはじめは、人々も、彼の、人よきを愍みて、かれこれと勞りしが、今は、全く、顧みるものなく、僅に、たゞ一人、心まめなる村人の、日々に訪ひ來て、慰めもし、勵しもあるものあるのみ。

或日、朝寢の農夫は、畑に出でて、木蔭の草叢に憩ひつゝありしが、例の村人は、傍近く寄り來て、なにくれと、物語せしが、やがて、話頭をば、そこら飛びかふ雀の上^ハに轉じて、その繁殖の、いかにも、たどろくべく、その

貪食の性の、まことに、たそるべきことなど、懇に、語り聞かせぬ。さては、我が田地の收穫を害するも、この雀の所爲にてはあらざるかと、農夫は、ふと、たもひつきぬ。

村人は、ことばをあらためて、さて、君は、白羽の雀を見たることありやと、問ふに、否、われは、嘗て、見たることなしと、農夫は、不思議なるれも、ちして、答へぬ。さればよ、その雀は、一年に、たゞ一羽、この世に生れ出づるものにて、日出でて後は、他の雀等のために害せらるゝを恐るれば、毎朝、早く、巢を出でて、食を求め、直に、

また、巢に歸るを例とすと、まことしやかに、語り續くるに、農夫は、いつか、好奇心に驅られ、いかにもして、この白羽の雀を見むと決心せり。

農夫は、翌朝、早く起き出でて、我が家の周圍を見廻しつゝ、やがて、野に出でて、諸處をたづね求めしかど、遂に、白羽の雀を見出さず。力なく、踵を廻して、我が家に歸り來し程に、日は、今、東天に上らむとして、かすかに、その曉の光を漏せり。ふと、見やれば、下男の、穀倉より出で來るあり。肩には、一俵の米を擔ひつゝ、急ぎ足にて、裏門より出で去らむとす。いぶかしく思ひて、追

ひすがり、汝は、いつくに行くぞと、問ひかけたれば、下男は、れどろきのみあまり、俵を投げ棄て、逃げ行きぬ。とかくするほどに、廐の方よりも、また、立ち出づるものあり。見れば、我が下婢なり。手には、いま搾りたりと見ゆる、牛乳の桶を持ちたりけるが、こも、急ぎ足にて、隣家の窓の下に寄りゆき、彼の桶をば、そこなる家婦に渡して、いくばくかの錢を受け取れり。

こゝに、農夫は、はじめて、家畜の仆れ死に、收穫の足らぬがちなるも、故なきにあらずと、悟りぬ。やがて、急ぎ、家内に入りて、妻をゆりねこし、さて、ことばをあら

ためて、われらの朝寝は、もはや、今日をかぎりとせざるべからず。われらの家産は、われらが眠りつゝある間に、われらの僕婢によりて、悉く消費し去られむとす。とて、今朝の出来事を、物語りぬ。

これより、彼は、朝起の人となりぬ。白羽の雀のことは、はやく忘れて、たゞ、僕婢の上へのみ、注意するやうになりぬ。かくすること、連月、彼は、ますます、我が産業の樂を覺え、つとめて起きし朝起も、いつか、習慣となりしが、僕婢等の不正は、全く止み、その家産は、漸々、舊に復し、期年の後、再び、樂しく、ゆたかなる生活を送るに至れり。

久しく見えざりし村人は、ある日、訪ひ來ぬ。笑ひながら、白羽の雀は、いかに」と、問ふに、農夫は、さもこゝちよげに、我が手をさしのばし、君よ、謝すべきことばもなし。神は、必ず、君の信切を見そなはすべし」と、答へしが、その眼には、ゆかしき涙の珠をさへ宿せり。

二一八、ベルナルド、バリッシー

昔、フランス國に、ベルナルド、バリッシーといふ人ありけり。その父母、甚だ、貧しかりければ、さらに、學校の

教育を受けたることなかりき、長じて、ガラスに忍がき、また、土地を測量することを、業と志けれども、妻子ある身の、これを以て、生計を立つるには足らざりしなり。

當時、フランスの陶器は、粗悪にして、釉薬、栗色なり。パリッシー、これを改良せむとねもふこと、久しかりしが、一日、イタリーの名工デラの製せる磁器を見て、心、ますます、これに傾けり。然れども、妻子あるがために、自ら、イタリーに行きて、その秘を探ることを得ざりしかば、自己の考を以て、種々の薬品を求め、白色の釉

薬と、彩色の薬とを探り、いださむとぞつとめける誠
に、これ、暗夜に、物を求めむとする類にして、あはれに
も、亦、大膽なる事なりけり。

かくて、パリッシーは、竈を築き、土器を買ひ、種々の薬
品を塗りて、焼き試みることに、年月をかさぬれども、試
験、一も中らず。さらぬだに、生計、ゆたかならざりしを、
今は、試験の費用に追はれて、貧困、已に、迫れり。されば、
身、自ら、試験の薪炭を買ふこと能はず、懇意なるガラ
ス工、又は、瓦工の、窯の一隅を假りて、小試験をなすこ
と、亦、多年にして、一も成らず。

彼は、これがために、毫も、心を屈せず、遂に、一の大試験をなさむとて、あるかぎりの錢財をつくして、三百個餘の土器を求め、藥を塗りて、ガラスの竈に焼くこと、數時間にして、いだし視るに、白色の釉藥、焼きつきたる者、たゞ、一個あり。

彼は、既に、成功の緒を得たりと思ひければ、自ら、石瓦を積み、家の傍に、竈を築きしが、七八箇月にして、漸く成れり。こゝに、彼は、土器の下地を製造し、更に、藥料を塗りて、早朝、これを、竈の中に入れ、火をたきて、日暮にいたりしかど、藥、未だ、焼きつかず。遂に、再び、旭の

光を見るに至れり。されど、彼は、猶、端然として、竈の前を去らず。その妻、僅ばかりの朝飯を持ち來て與へけるが、彼は、これを食ひつゝ、うちまもりてあるほどに、その日も、亦、空しく暮れぬ。かくすること、七晝夜にして、遂に、成らず。彼は、面燠ぼり、身體疲れ、更に、この世の人とも見えざりき。

パリ、シーは、これを、ことゝもせず、こは、藥料の、未だ、宜しからざるがためなりとて、更に、工夫をこらしけれども、費用、已に、盡きければ、友人の助を乞ひ、辛うじて、物品を調へ、やがて、又、竈に火を點ぜり。かくて、藥料、

未だ、焼き着かざるに、薪、また盡きぬ。彼は、機を失はじとて、家の板屏を引き抜きては、投げ入れ、投げ入れしけり。板屏、已に、盡くれども、薬は、未だ、着かず。彼は、猶、十分間、火力を保たせむとて、家なる椅子を持ち出でて、投げ入れぬ。まだ、何をがなと見廻すに、寢臺の外には、一物もなかりければ、これをも、打ち碎きぬ。今よりは、一家の者、いづくに居り、いづくに眠らむ。妻子は、そのありさまを見て、發狂せし者なりと思ひ、泣き號びて、逃げ走れり。然れども、この最後の火力により、白色の釉薬、はじめて、焼き着きたり。パリッシーの喜、それいか

にぞや。

然れども、この時は、唯、焼き着け得たりといふまでにて、賣品とする程の陶器にあらざりき。されば、彼は、猶、許多の試験を要しけれども、今は、才覺、已に盡きて、如何とも志がたくなりぬ。こゝに、酒屋の主人あり、パリッシーが志の撓まざるを感じ、その家に食客たることを許したり。パリッシーは、これがために、僅に、生命をつなぐことを得て、毎日、試験に従事すること、半年なりしが、又もや、失敗せり。

パリッシー、自ら、この時の事をいひていはく、余はい

かなる失敗にも堪へ、いかなる艱難をも意とせざりしが、唯堪へ難かりしは、家人の詬罵なりき」と、誠に、終日、勞苦の後、家に歸りて、妻子に慰められ、或は、心合へる友人と、うち語らひてこそ、失敗も慰み、艱難にも堪ふべけれ。出でては、近隣に笑はれ、入りては、家族にはづかしめられ、衣破るれども、綴る人なく、腓の肉は、盡く落ちて、沓下を着くるに由なく、蓬髮徒跣、愴然として、竈の前に立ちたりしパリッシーが心は、いかにありけむ。

然れども、精神一到何事不成。パリッシー、經驗を積む

こと、十八年、遂に、精良無類の陶器を作ることを得、志かのみならず、畫くところの草木鳥獸までも、一々、寫生して、工夫しければ、その巧妙、また、比類なく、その名、世界に高くなりぬ。前年、ロンドンにわいて、賣物に出でしパリッシーの皿は、徑一尺あまりにして、價、わが六百圓に當れりといふ。また以て、その貴きを知るに足らむ。(中村正直著西國立志編)

二九、 塙はらわ檢校保己一

塙檢校保己一は、武州兒玉郡保己野村の人なり。群

書類從五百餘卷を刊刻せしなど、和漢古今、瞽盲の第一流に居る人なり。年十四、他の瞽者と共に、江戸に來りしが、二人とも、たよるべき所もなく、九段坂の上にて、さめざめと泣き居たり。時に、内藤安房守、御殿より退出せられしが、この様子を見て、いたくあやしみ、駕籠脇の侍に、「いかなる譯なるか、尋ね來よ」と命ず。侍來て、仔細を問ふに、我々兩人は、兒玉の者にて、遙々、江戸に、修業のため出でたるが、本銀町に、かねて、知る人ありて、尋ねたるに、その人は、今、行方知れずなりぬ。頼む木蔭に、雨漏りて、せむ方なければ、又々、故郷へ戻るべ

きか」と談合中なりと答ふ。侍は、その由を復命せしに、安房守、「それは、いかにも、不便のいたりなり。ともかくも、屋敷へ伴へ」とて、連れ歸りて、扶助せられたり。

さて、その一人は、琴を習ひて、終に、世に名人と呼ばるゝ上手になりしが、檢校は、極めて、不器用にて、遊藝など、さまさま、習はせられたれど、なに一つ覺えず。常に、晝寢のみして、甚だ、怯弱なりしが、たゞ、書を好むこと甚しく、ことに、よく、百人一首を諳誦せり。安房守、これを聞きて、さては、彼には、書を聞かせ、歌を詠ますべし」とて、師を選び、教を受けさせしに、果して、上達せり。

廿一二の時には、小著述をなし、が、その師、これを閲して、この書、よく出来たり。されど、その許の才にて、かやうなる瑣事をなすは、甚だ、惜しきことなれば、必ず、なすまじ。更に、思をかへ、一層、大志を企つべし」と、いひければ、檢校、大に、その言に感じ、それより、群書類従著述の念を起したりとぞ。後にいたりて、番町に、和學所を取り建て、かつ、盲人の總録官となれり。この總録官となる人は、必ず、千萬金を蓄へざるものなきに、檢校は、數千金の借財を殘せり。こは、みな、學校の用と、刻書の用とに費し、なりとか。

檢校極めて、強記にして、一回讀みきかすれば、よく、記憶して忘れず。常に、和漢の書に通じたる書生、五六人を養ひわき、群書類従の稿本を寫さしめ、傍、奇書珍書を讀ましめ、それを聞くをたのしみとせりといへり。會津の藩士大倉嘉藏といふ人、長く、その家に寓客となりて居たるが、余は、それより聞きしなり。まことに、稀世の人物とやいはむ。(喜多村香雲著五月雨草紙)

三〇、活版の由來

我が國に、活字といふもの出て來てより、著述刊行

上に、大なる便益を興へしことなるが、この活字を創めしは、本木昌造といふ人なり。

本木昌造は、文政七年、長崎新大工町に生れき。代々、幕府に仕へて、和蘭語の通譯官なりしが、廣く、西洋の事情を調べ、多く、かなたの書を読讀するにつれて、その印刷術の精巧なるに感じ、かくの如き術を、我が國にも起したしと思ひたち、或は、その理を、洋籍に探り、或は、その術を、西洋人に質し、種々、工夫を凝らしたり。嘉永五年、はじめて、^{ネリシコ}流込活字といへるを製して、自著、和蘭通譯記を印刷せり。これ、實に、我が國鉛製活字

版の根元なり。

安政二年、故ありて、獄に下されけるが、常に、默座して、沈思し、自ら、製りし活字版の改善を工夫するより外に、餘念もなかりき。

その赦さるゝに及びてや、或は、文字を、水牛に彫りて、鉛に打ち込み、或は、鋼鐵に刻して、銅に打ち込むなど、さまざまの工夫を凝らしたり。されど、改善の功、擧らざりしかば、暫く、念を、印刷業に絶ちけり。

萬延元年、蒸汽船二隻を、外國より買ひうけ、自ら、その船長となりて、新事業に着手せり。これより、或は、幕

府の命を奉じ、將軍家茂公を載せて、紀州加太浦に砲臺を巡視せしこともあり。或ははやてに吹き流されて、八丈島に漂流せしこともあり。

王政維新の際には、飽浦製鐵所に入りて、製鐵の事を掌り、明治二年には、長崎に、私塾を開きしが、月謝も塾費もすべて、徴收せぬさだめなりしかば、年々の失費、千圓以上に及びぬ。是に於て、維持費を求むべき必要生じ、再び、印刷事業に、心を傾けたり。

かくて、資金五萬圓を投じて、活字改善業に、心を碎く折しも、偶、米國人某が、清國上海にて、巧妙なる鉛版

活字を製出せしよしを聞き込みければ、急ぎ、人を遣りて、視察せしめたれど、深く、その術を秘して、知らしめず。時に、重野安釋、上海より、件の活字と、その印刷器械とを買ひ來りて、藏せりときこえしかば、更に、人を介して、申し込みし末、遂に、これを譲り受けたり。さて、昌造は、これを、活字改善の標本とは志たりしかど、なほ、意に満たぬところなほかりければ、米國の宣教師フルベッキに謀り、その紹介にて、上海なる活版技師を招聘して、師となし、活版傳習所といふを設け、活字製造及び、電氣版印刷の業を創めき。これ、實に、わが國活

字印刷術完成の端緒なりしなり。

昌造は、一はこの業によりて、窮士族に、産を授けむと欲せしが、種々の困難生じて、事意の如く運ばず。長崎の活版所は、これを、門人某に託せしが、技術の進歩、爾來、大に見るべきものあるに至れり。

この年、横濱に、毎日新聞發行の舉ありしが、昌造、これに與り、社員を送りて、同地に、活版工場を起し、新聞印刷に従事せしめたり。事業の、漸く、成功の域に進むや、更に、門人を、東京に出して、印刷局設立の議に與らしめ、かつ、下谷泉町に、分工場を開かしめたり。後、この

分工場を、築地にうつし、が、今の築地活版所は、これなり。

昌造は、かくても、休息することなく、自ら、工場の監理に勵精するは、勿論、人を督して、活版材料の改善に、心を勞すること、十年一日の如くなりしも、明治七年、遂に、郷里にてみまかりぬ。享年五十三なり。(坪内雄藏著)

高等科國語讀本抄録

三月

終

終

終

中等國語讀本卷二 終

The are your books

明治三十四年十一月十五日印
明治三十四年十一月十五日發
明治三十五年二月七日訂正再版印刷
明治三十六年二月二十日訂正再版發行

定價表	
三、二	每冊貳拾貳錢
五、六	每冊貳拾四錢
七、八	每冊貳拾四錢
九、十	每冊貳拾四錢

明治三十三年五月十四日
中華學校用文部省檢定濟



著者 落合直文
東京市本郷區駒込淺壽町七十八番地

發行者 三樹一平
東京市神田區錦町一丁目十番地

印刷者 新井豐造
東京市神田區錦町三丁目二十五番地

印刷所 明治印刷所
東京市神田區錦町三丁目二十五番地

發行所 明治書院
東京市神田區錦町二丁目
(特電話本局二四三八番)
關西專賣 吉岡平助
大阪市東區備後町四丁目
(特電話東四二九番)

